感するところであった。

もちろん，本書にも限界があり，課題がないわけではない。著者は，多くの場合フランス側の資料を用いている。ベトナム近代美術史研究では，個別の美術家の事蹟や作品論などの研究がいまだ乏しく，一次的な文献資料は，ベトナムに比べ，圧倒的にフランス側で整理，保管されておりアプローチもしやすいという事情もある。そのため，植民地統治者としてフランス側が，たとえば美術学校をどのような意図で設立したかといった点は，詳細に分析，検証されるものの，ベトナム人がそれをどのように受け容れ，主体的にかかわっていったかについては十分解明されてはいない。今後，ベトナム近代美術史研究が進展し，個々の美術家たちの日記や著作などが公開され，その肉声が伝えられることで，ベトナム側の受容史も併せて，より豊かで重層的な美術史が編まれることと思う。

また，考察の対象として取り上げるべき重要な美術家もまだまだ多い。ほんの一例であるが，絹画の創始者としてのグエン・ファン・チャンの評価が，いわば「装飾藝術」から「純粋美術」へと変転するという指摘は鋭く，興味深いが，絹画の「発明」には，どのような事情があったのか，そこにほかの画家たちの貢献はなかったのか，解明される必要があるだろう。1930年代初頭のほかの画家たちの絹画の優れた作品を見るにつけ，絹画の「発明」をファン・チャンひとりに帰することが正しいのかどうか，今後より詳細に検証されるべき問題であろう。

それでも本書が，ベトナム近代美術史研究に貢献し，その水準を大いに上げたことは間違いなく，たとえ前述したような限界が本書にあったとしても，ベトナム近代美術史研究に不可欠の基本文献としての意義を，いささかも損なうものではない。今後は，本書の成果を基盤に，後に続く研究者が，より個別の事象への考察を深めていくことになるだろう。また本書が与えるインパクトは，ベトナムにとどまらず，東南アジア近代美術史研究全体に大きな広がりを持つように思われる。本書が，美術史研究を志す若者に，ひとつの里程標となり，東南アジア近代美術史への興味を開き，関心を呼び起す，そんな未来に対する期待を抱かせてくれる。

（後小路雅弘・北九州市立美術館／九州大学名誉教授）

早瀬晋三.『すれ違う歴史認識――戦争で歪められた歴史を糺す試み』人文書院，2022，412p.

本書は，早瀬晋三氏（以下著者）の多様な業績から過去10年ほどのアジア・太平洋戦争に関わるものを中心に，全体としては「記憶」論としてまとめたものである。違う目的で書かれた論文を集めたものであるにもかかわらず，本書は一貫性を持たせることにおおむね成功している。というのも，単にアジア・太平洋戦争についてのフィリピンの「記憶」を論じているのではなく，全体を通して，東南アジア史やグローバルな記憶の政治に目配りをしつつ，歴史をめぐる日比関係に対する著者の評価となっているからだ。

序と結を除くと4章から構成されている。

第1章　新聞と戦争――大本営発表をさらに粉飾
第2章　「戦記もの」の挑戦――大量死と敗戦
第3章　日系人の虚像からの解放――共有されない歴史
第4章　遠退く戦争責任――すれ違う歴史認識

第1章は主には東南アジア島しょ部で刊行されていた新聞，第2章は1,600点もあるフィリピン戦についての回顧録や部隊史，第3章はバギオとダバオの碑や博物館における日系人をめぐる表象，第4章はブルネイの北にあるラブアン島の博物館とアキヒト皇太子・天皇の二度のフィリピン訪問を論じている。

著者の立場は明確である。「記憶」の問題を国際政治の変数ではなく，国民間の友好のための共通理解の礎として論じる。よって，本書では日本人とフィリピン人は，それぞれに異なる歴史を背負った人々である。侵略した日本人と侵略を受けたフィリピン人との関係を，いかにして「広がり

をもつ蓄積あるもの」にすることができるのかが，課題である（p. 20）。

それでは，何をもってして日本人は歴史に向き合うことができるのだろうか。1990年代以降の思潮や社会運動からは，それを日本政府に対するいわゆる戦後補償運動に求めることも，日本の戦時動員体制や日本による大量破壊や殺戮を叙述することに見出すこともできるだろう。しかし，著者はこのような選択を取らない。より抽象的に，「ねじ曲げられた歴史」を「糺す」ことに求める。「日本が戦争中になにをし，戦場となった人びとの心になにを残したのか，さらに戦後どういう歴史観をもって戦争責任・戦後責任に向かいあったのかを考える必要がある」と述べ，事実・記憶・責任の三層から歴史に向き合うべきことを主張する（p. 20）。

他方，著者は単なる実証に基づく歴史を描けばこと足りるとも考えていない。「優れたノン・フィクションは，題材の取捨選択，構成などによって，『真実』から遠ざかる」と述べる（p. 151）。つまり，客観的であろうとする描写においてさえ，作者の選択により，その描写の目的や意味するものが異なってくる。このようなテキスト創出の根本的な原理を無視した「数をあわせるだけの員数主義」も問題であるとする（p. 20）。ややうがった見方かも知れないが，歴史を「糺す」とは，日本の侵略を忘れようとする人々や安直に決まり文句としての平和や友好を繰り返す人々に対して，それぞれの立場からの様々な叙述や行動によって警句を発し続けることと解釈できる。

もっとも本書の魅力の一つは，数量的な側面も含め，細部にわたるまで，それぞれの事柄について緻密な描写がなされていることにある。様々な定期刊行物を悉皆的に集め，資料集として刊行してきた著者の能力がいかんなく発揮されている。つまり，徹底的に資料を渉猟し，綿密な調査を行い，それでいて個々の事例を戦略的に論じることにより，「グローバル，リージョナル，ナショナル，ローカルの視点」（p. 241）を取り入れることに成功している。評者としても，アジア・太平洋戦争期やその前後の資料調査には，著者がまとめてきた，様々な「研究工具」を利用させてもらっており，本書においても，改めて著者の資料の扱い方と着眼点には感銘を受けている。

このように，東南アジア研究や日比関係史において本書が貢献するところは極めて大きいが，他方では，21世紀の日比間における「記憶」のいくつかの問題も浮き彫りにしている。およそ3点あり，とりわけ第2と第3の点は，本書に対する批評というよりも，本書によって改めて気づかされる今日の課題である。浅薄な論点整理かも知れないが学術の発展のためにあえて論じておきたい。

第1には，著者は，日本人の立場から日比両国民がより適切な友好関係を育むことを望み，そのために必要な歴史がいかなるものなのかを考察している。この立ち位置を取る場合，その間にいる人々をどう位置付けるのかという点が問題となる。著者は，日本人も日系人もあまりにも自民族の死者を中心に追悼をし，自民族の足跡を称揚していると批判する（第3章）。評者としては日本人を批判するという点には首肯するのだが，混血者が大半で，すでに数世代目にもなる日系人にも同様の批判を向けうるのだろうか。日本政府が日系人を利用した政策を施行し，そこに産業界が追随し，追悼式典等を通して，日本人が日系人に自民族中心の歴史認識を促しているという批判は妥当である。しかし，著者の日本人批判が前景化しすぎてしまっており，日系人にとってそのような歴史認識が何を意味するのかは，もう少し踏み込んだ調査と考察があっても良かった。

第2には，資料をめぐる問題と研究の継承についてである。資料を収集・整理・公開しようという著者の姿勢と多大な努力には，称賛のことばしかない。他方，著者があげるフィリピン人の認識は，資料の発見や整理・公開ではなく，むしろ学生の感想文，壁画や像，さらには追悼式典の持ち方に依っている。端的には，フィリピン側では資料の収集・整理・公開もオーラル・ヒストリーの収集もあまりないのだろう。日本での資料状況が良くなれば良くなるほど，日比の間での資料の蓄積の差が大きくなってしまう。日本語資料と中国語資料の違いが興味深く論じられているが，著者の言う通り日本語資料をフィリピン人と共有することは極めて困難である（p. 241）。また，フィリピン人のリカルド・ホセ氏が対話相手として複数

回登場する（pp. 18, 299, 302, 317）。ホセ氏は，優れた歴史家であり，人格者である。それに日本語資料が使える。そして，1980年代～90年代には日本人研究者との共同研究のパートナーであり，この共同研究が日本占領期フィリピンについての研究の礎となってきた。しかし，次世代では，そのような交流や協働はほとんど行われてきていない。ホセ氏以外のフィリピン人研究者が登場しないことは，この時代に関心をむけるフィリピンの歴史研究者が，その後十分に養成されてきていないことを示している。

第3には，日比双方の記憶のあり方である。1990年代には外国人被害者について日本政府に謝罪と補償を求める社会運動が生じたが，それから30年経った現時点からみると，この運動の日本政府に対する成果は微々たるものだった。この運動が十分な成果を収めることのできなかった大きな要因には日本人の歴史認識があろう。日本人に幅広く見られる歴史認識とは，国際的な約束を日本国家は果たしてきたのだから，たとえ日本が引き起こしたものであろうとも，フィリピンを含めたアジア諸国に対する侵略と暴力の歴史をあえて論じたくない，聞きたくないというものだろう。この歴史認識を揺さぶるやり方として，著者が言う「ねじ曲げられた歴史」を「糺す」ことがある。

他方，圧倒的な被害者であるフィリピン人の歴史認識はどのようなものなのだろうか。評者は，被害を受けた側も，彼らなりに複雑な歴史認識を持つのだと思う。場所によって，戦場の実相や被害の度合いも違うし，フィリピン人同士の暴力の問題もある。それに最近の荒哲氏の著書［荒 2021］が論じるように，フィリピンの周縁社会においては階級間の対立が，記憶をめぐる深い断裂をもたらし続けていることもあるだろう。著者は，フィリピン人は記憶を継承していると強調するが，戦争を体験した世代と，戦争終結から40年も50年も経って生まれた人々では，当然その記憶も異なるのではないだろうか。フィリピンは日本人の戦争犯罪者を裁いてきているし，日本の賠償やODAの対象にもなってきた。もはやこの時代において，戦争終結後に起きた様々な交渉や行為を抜きにして，アジア・太平洋戦争を評価することはできないだろう。これらの点から，評者にとっては，著者の立ち位置はやや単純化されすぎているきらいがあると感じる。ただ，本書がフィリピンにおける記憶のあり方も考察の対象としていることは歓迎したい。

最後に，やや粗雑な言い方をすれば，評者にはアジア・太平洋戦争をめぐる日本人の歴史認識がこの先「ねじ曲げられた歴史」を「糺す」方向に変るようには思えない。それに，フィリピンにおいても，積み重なっていく歴史の中で，日本占領期が特別な重要性を持つとも考えにくい。日本と同様にどのように忘却に抗していくのかが求められている。[1] その中で，ほぼ当事者がいなくなりつつある現在，どのようにすればこの痛ましい時代の歴史を継承し，そこに意義を見出すことができるのかは，日比両国の歴史研究者の課題である。そのためにも，日比の歴史研究者の双方の努力や歴史研究者間の協働が求められている。そして，その際に歴史研究者に求められる基本的な姿勢とは，都合の良い記憶や忘却に抗して，やはり「ねじ曲げられた歴史」を「糺」そうとすることなのだろう。

（岡田泰平・東京大学大学院総合文化研究科）

参考文献

荒　哲．2021.『日本占領下のレイテ島――抵抗と協力をめぐる戦時下フィリピン周縁社会』東京：東京大学出版会.

チェン・チュア，カール・イアン．2017.「想起を介した忘却――日比におけるアジア・太平洋戦争の碑と観光」岡田泰平（訳）.『歴史評論』808: 38–49.

José, Ricardo. 2012. War and Violence, History and Memory: The Philippine Experience of the Second World War. In *Contestations of Memory in Southeast Asia*, edited by Roxana Waterson and Kwok Kian-Woon, pp. 185–200. Singapore: NUS Press.

1) フィリピンにおけるアジア・太平洋戦争の記憶および忘却については，例えば，チェン・チュア［2017］やJosé［2012］の研究がある。